

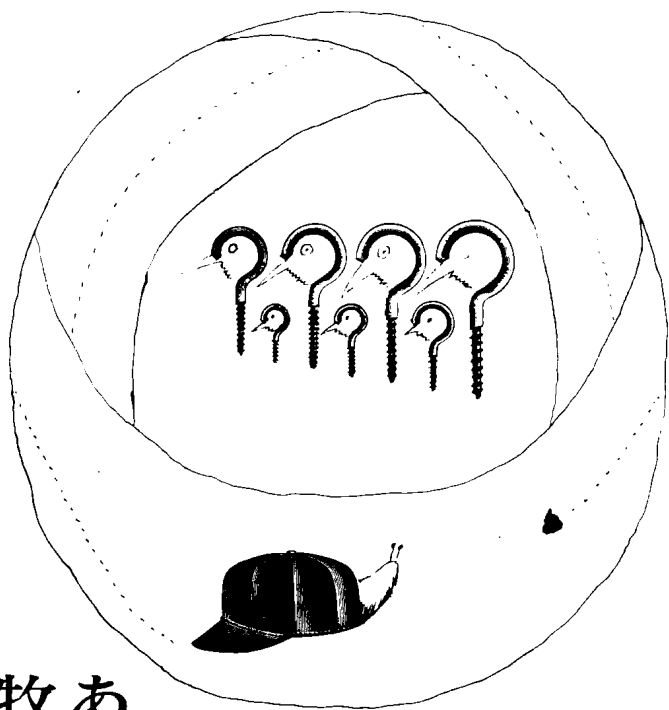
あなたはどのメビウスの輪 牧 羊子

トーク&エッセイ



トーク&エッセイ

海竜社



あなたはどのメビウスの輪
牧羊子

トーク&エッセイ



あなたはどのメビウスの輪

昭和五十五年十月二日 第一刷発行

著者 牧 羊子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二 郵便番号 一〇四
振替 東京一四四八八六 電話 東京(〇三)五四二一九六七

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Yoko Maki 1980 Printed in Japan

牧 羊子 (まき ようこ)

詩人。大正12年、大阪市生まれ、奈良女高師
物理化学科卒。作家開高健氏夫人。詩集「コ
ルシカの薔薇」「人生受難詩集」の他に、生
と生活の周辺を独特の感性で捉えたエッセイ
「自作自演の愉しみ」「他人からの出発」「お
かず咄」「味を作る人々の歌」などがある。

はじめに

川のある町から遠ざかつていく。

日々の生活の外をめぐる川、暮らしの心の隅々にせせらぎを送る川。臉を閉じるといくつかの姿やさしい川たちが甦る。

古雅な屋根つきチャペル橋を渡すルツチエルン湖にそぐロイス川、ロマンの町ハイデルベルグを洗うネッカー川、ゆたかなマロニエとプラタナスがすばらしい散歩道を川沿いにもつヴィシーのარიエー川、雨に烟る蘇州に水墨画さながら舳い舟を浮かべる堀川。

四つ橋風の反り木橋を架けていた曲り川は小学校へ通う道に、学生寮の明け暮れをなぐさめられた古都の佐保川、青春の蹠蹠を彩る中之島公園に凭れて流れた堂島川――。

東京に住んでからも桜並木が艶やかだった千川が消え、神田川の中流域のほとんどが暗渠となっていくのを見てきた。麻布台のふもとを潤していた古川も、一ノ橋・二ノ橋・三ノ橋の名のみの川の面影を遺して、東京っ子でも若い人たちはまず識らない。古川は多摩川から曳かれた水道堀割であつた。

私の軀と心の川にも沢山の水が流れて去つた。いまでも水面を波立たせて、幾条か。あるものは

奔流をやめず、別のはせせらぎ、はたまた茫洋と流れる。けれども『還らざる河』は誰のふところにも深い渦を巻いているものだ。

森があり林を過ぎ、人びとが行き交い、鳥や虫やけものたちを映し、魚や藻を棲まわせる川のイメージが生なまの記号として、私の記憶に整理し直される日を待っていた。トーク&エッセイは形式も内容もこんな期待から蘇生した。私の『還らざる河』の一つである。

独りで生きることの意味を『自作自演の愉しみ』（PHP研究所刊）に託したときから、その個と個の対立と燃焼を尋ねる『他人からの出発』（読売新聞社刊）につづく、対たいの輪を第三者とのかわりに拈ひげた『あなたはどのメビウスの輪』を考えていたからである。『おかず咄』『味をつくる人たちの歌』とは異なる河川の流れとしてである。もっとも水源は一つに違いないが。

メビウスの輪にひっかかるなら、と云うよりむしろこだわって貰もらいたいために、同じ表題の小文をあえて冒頭に据えた。それを読んで貰うことで、ここに問いかけた言葉の奥もとに灯ともした、生の記号が透けて見えてくる仕掛けのつもり。親と子、男と女、友として、未知との出逢い、物——とりわけ食べものを通しての、人と人とのかわりの到るところにメビウスの輪を読み取って貰えたら、滋味はさらに陰翳と耀ひかりきを増すのでは、と密ひそに熱く希ねがうてのことである。

対談や鼎談をトーク、エッセイには各新聞、雑誌に連載のものにかぎって拈ひんだ。一回の分量はわずかだが、まとめることでそれぞれの役割を担い得たと思っている。拈ひぶことで裁たち落したのもあれば、一部、既刊のと重複したところもできたが、形の上からも川のイメージを通した。

海電社の下村のぶ子さんの提言であるトーク&エッセイの語韻に、云わば私は私の食欲を大いに刺戟されたからでもある。そこでこう云う形の本が刊行の運びとなり、本来ならば「あとがき」で済ませるところを、そこは「黄色い笑い」（『他人からの出発』収載）に再登場させて、その替りにはこの「はじめに」の文章で『あなたはどのメビウスの輪』への懸橋とした。

六章にわけられたメビウスの輪、そのまた内側でトークとエッセイに、さらに細かくそれぞれの領域を分担するメビウスの輪のどれか一つでも、共有し合える輪を持つことができれば倅である。

へ文字の置き換え遊びでよくやるのはアナグラム。例えばマキ・ヨーコをヨ・コマキと入れ換え、楊小巻の漢字を当てる。たちまち蘇州美人ぐらいには連想してもらえそうだが、ヨ・キ・コマとすると陽気駒でも妖気駒でもじゃじゃうまのイメージでしかなくなる。

このせち辛い世に、一人前の大人が悦に入って夢中になることか。眉をひそめる方には仏文学者渡辺一夫先生の近刊書『語学誤学雑誌帖』の一読をおすすめる。アナグラムはマケドニヤ王とその妃の紀元前からの遊びであると紹介されている。その上に師の名訳著ラブレールのガルガンチュワとパンダグリエルの物語の随所に駆使されている原作者のアナグラムを、自在したたかな日本語に写された秘儀をうかがわせてもくれる。

そこでラブレールが、権威のばけものに墮した当時のソルボンヌ神学部を痛罵したアナグラムの効用に、五百年後の日本語で私たちは快哉を叫ぶことができる。そこでもうひと跳びして、井上

ひさし氏の芝居の地口、語呂合わせの奔放な面白さには定評がある。氏は上智大学の仏文科出であるからして、ラブレターの洗礼を受けられた、と私は睨んでいる。さて氏がねらいうちする標的は何ものであろうか

この本からは外した「ことば遊び」と題する「あすへの話題」(日本経済新聞連載分1975年2月15日付)の一部である。前半が時事につきすぎているので採らなかつたものだが、こんなアナグラムにもメビウスの輪を結び合える精神をこそ歓迎したい、わけである。

さて、おわりにもう一度、あなたはどのメビウスの輪、と共鳴する、しない。

さまざまな私のわがままを容れて下さった社長の下村のぶ子さん、いつもすてきな微笑で根気よくつき合って下さった同社の仲田てい子さん、ありがとう。

一九八〇年九月

牧 羊 子

目次

あなたはどのメビウスの輪

はじめに	1
------	---

女の視線

メビウスの輪	14
心のゆたかさ	15
風という字は	17
色彩の普遍語	19
一味ちがう配慮	21
ゴミが片づけられない男と女	23
いやあな感じ	25
去来二十余年	26
食の欲びをつくる	28
あちらにあってこちらにもある	30
女の視線(一)	32
女の視線(二)	33
テレビ付き餓死	35
本末顛倒	37

《トーク・トーク》

井上ひさし

男の本音・女の本音	40
-----------	----

味覚と文化

花のはじらい	64
豌豆とキヌサヤ	66
贈りもの	68
間口と奥行	70
文化と教育	72
ケチとミエ	75
豊かさを支える	77
キノコ好き	80
切餅・丸餅	83
立春さまざま	85
《トーク・トーク》	
味覚と文化	89

楠本憲吉＋荻 昌弘

なぜ夫婦なのか

選ぶ……………110

一方通行……………112

ある生甲斐……………114

箱入りムスコ……………116

測る……………118

唄う……………120

抑える心……………123

コトバのいのち……………125

豊饒と倦怠……………127

《トーク・トーク》……………130

なぜ夫婦なのか……………130

富士正晴

他人の倫理

母の目……………168

女手にあまる……………169

チビッコ怪談……………171

ハート人間	173
私の老人の日	174
変わればかわるほど	176
現代中国語用語	178
自薦迷調子	179
若ものと親のミゾ	181
若ものをみつめて	183
進学はほんとうに必要なか	185
他人の倫理	186
《トーク・トーク》	
三浦朱門＋野村 実＋小柳恵子	
親と子の絆	189
食	
食べることは生きること	
初春の味	206
ナマコ	206
寒ブリ	207
煮こごり	208
ハマグリ	210
西京漬け	211
春の味	213

白和え……………213 まぜご飯……………214 野のかおり……………216

夏の味……………218

ハタとイシモチ……………218 アケビノツル……………219 トマトソース……………220

鱧……………222 鰻巻き……………223 シソ……………224 雑碎……………226 おつまみ

……………227

秋の味……………229

ナスビ……………229 ズイキ……………230 マイタケ……………232 コンニャク……………232

……………233 点心……………234 秋アジ……………236 酔蟹……………237

冬の味……………239

柚……………239 鱈……………240 臘腸……………242

《トーク・トーク》……………大庭みな子

食べることは生きること……………244

言葉のいのち

《トーク・トーク》……………小野十三郎

詩・歌・唄……………262

日本語のむつかしさ……………273

差別と用語	274
ペン・フレンド	275
歌舞伎	276
夜桜	277
二匹の猫	278
《トーク・トーク》	
開高 健	
黄色い笑い	280

ブックデザイン——司修

女の視線

メビウスの輪

食事のときに事欠かせない茶わん一つを取りあげても、ふだんは何気なく世話になっているこの器物にも、たいへん深遠な機能と存在の意味が形に表されていることを知る。

へ粘土をこねてそれで器物をつくる。その器物の中心のなにもないところで、器物としてのはたらきがある」とすでに二千年の昔に、老子は解き明かし、**「有のもって利を為すは、無のもって用を為せばなり」**と語っているくらいだ。

この真理の例証として、老子は住居もまた、戸口や窓をつけ屋根をのせて作るが、家の本命はその中心の何もないがらんだりの空間、囲いにかこまれた中に家としての働きがあることも挙げている。明察機微を捉えて、文字通り眼光紙背に徹す哲人の言動に舌を巻くわけだが、これも指摘されてみれば、コロンブスの卵のように、今さらおどろくにあたらない認識ぐらいに、平凡人には錯覚される。そこがまた、ただものでない認識の深い罫でもあるわけだろう。

ところがこの老子の認識世界はメビウスの輪の位相空間である、と現代用語で判定されるならば、そのコロンブスの卵もたちまちひっくりかえるのではないか。

メビウスの輪というのはご存知のように、細長く切った紙片を一回ひねってノリづけして作る。